歴史探訪

斜面環境
六十里越街道、防災とアメニティー

中村 三郎
なかむら さぶろう
防衛大学校名誉教授 理学博士

1
はしがき

1960年代の数年間地すべり調査のため、山形県東田川郡朝日村大網地区を足しげく訪ね、地域の人々に支えられ各種の調査を続けることが出来た。当時　新潟・鶴岡まわり、あるいは山形・新庄・鶴岡まわりで現地へ行ったが遠い道のりであつた。その後は県のご厚意による車で、当時の「六十里越街道（新道）」を経て山形から直接朝日村へ送っていただいた。その折り街道にかかわる様々な話を拝聴していた。

今思うと、朝日村大網・田麦俣を訪ねた当初は、ひたすら地すべり地盤調査のみに専念していて、街道古来の人と自然に関わる認識を深める事もなかった。しかし地域の人々とのふれ合いが深まるにつれ、古い歴史をもつ六十里越街道や湯殿山との関わりなどについて興味を抱き、調査地に近い注連寺・大日坊に度々詣で、著名な即神仏（ミイラ）に手をあわせていた。街道沿いの志津・田麦俣・大網・七五三掛等の各集落は、月山・湯殿山・羽黒山等出羽三山信仰と関わり深く、いわば参詣者のための宗教集落の役割が大きかったと言うことも知った。月山山麓の豊かな水・爽やかな緑・新鮮な空気にふれると、改めて六十里越街道に対する憧憬とともに、人と自然と信心の重さのようなものを感じさせられる。一方、地球温暖化が取り沙汰されている昨今、私はふ！と「地盤環境の縄文がえり」などということも愚考し、月山の自然賛歌とともに、中山間地における里山の防災とアメニティーの今後について思うこの頃である図-1、写真-1、2、3。

2
「がっさんダケ」と「ミズ汁」

五月半ば、大網地すべり地塊上部調査の昼めし時、当時の朝日村調査課の担当者である佐藤さんが「一寸待ってけれ」と言い、地すべり地背後の滑落崖を這い上がり、長さ15cmほどの細い小さな「竹の子」を一抱え採ってきた。「これ、がっさんダケと言うんだ、皮むいて味噌付けて食ってけれ、美味いぜ」と言う。私にとって初

めて食う珍しい山菜であり、ポリポリーと喰うと新鮮で実に美味い、ビールがあれば最高などと思った。五月末までが旬とのことである。加えて　皆で座っていた草っ原付近の「ミズ」の葉を手のひらで短くちぎり　ポン！とお椀に入れ、脇を流れる小川の冷たい清水を入れ、味噌を入れて攪拌し、いわば野外のインスタント味噌汁をつくってくれた。初夏のような暑い日ざしの中で、「むすび」と共に食べた「ミズ汁」の爽やかな味と地域の風情は忘れられない。

大網の自然の中で体験するこの種の食文化や、地域の人々との話題の交流は何もかも興味深い。農家では便所がしばしば別棟になっているが、「ある朝おきて便所へと思ったら、別棟だけが数m下方へ移動していた……」という、この種の話（渡部貞一・佐藤一亀さん他

図-1 六十里越街道概略図（中村）

写真-1 注連寺
弘法大師が湯殿を開山した折り、堂宇を建てたと伝えられる歴史ある寺。鉄門海上人の即身仏を安置

写真-2 大日坊
弘法大師が開基された寺として知られる湯殿山総本寺。如海上人の即身仏を安置

写真-2 西川町志津口にある「六十里越街道」碑（4/23）。

1960)や家屋異常の記録(渡部留吉、朝日文庫)は調査にも大いに役立つ。また前述の古刹大日坊は、過去の地すべりに由って今日の場所に移転したという。地すべりによる地表・地塊の変異は、古来集落の人々の生きざまにも大きな影響を与えてきた。

3
六十里越街道　いまむかし

山形の自然と人そして生活を考える時、まず頭をよぎるのは飯豊山地に源を発して日本海にそそぐ最上川と、陸路の六十里越街道である。また、街道と志津・田麦俣・大網等の各宗教集落と出羽三山の山岳信仰との関わりは古来よく知られている。中央アルプスの山裾で育った私は、早朝、山に向かって手を合わせていた父親のことを思い出す。傍らで眺めつつ理由もわからぬまま私も真似て手を合わせていた。私達は、何時・何処にいても美しく清清しい景観、きびしくも悠然と聳える山々などに接すると、ふ！と色々な思いが去来する。古来　山や川には神々が宿るものと信じ、山で聞く風の言葉、川のつぶやきを聞く時感じるのは安らぎであろうか、癒しであろうか。折にふれ、自然と信仰との関わりなどについて考えさせられる図-2。

「六十里越街道」は、古来日本海沿いの庄内と羽前内陸部を結び、庄内の塩や魚を内陸へ運ぶ重要な道であり、中世以後は出羽三山道者の参詣路として利用され、なかでも湯殿山参道として重要な役割を果たしてきたという。資料(山形県教育委員会1981)によれば、「出羽三山の山岳信仰がいつ頃から始まったのかについては明らかでない。月山神社が最初に尊崇され、羽黒山も平安初期から崇拝されたようで、末期には修験の修行が行われ、鎌倉・室町以後に羽黒派山伏の活躍が著しく、一般民衆の間にも浸透するようになり、江戸時代には年間約三万人が通った記録が残っている」という。当時街道の特徴は、利用者の大部分が出羽三山の参詣者の行人であったため、街道の宿場も宗教集落としての性格をもっていた。

俳聖　松尾芭蕉(1644～94)は、1689年弟子の河合曾良を伴って江戸をたち、東北・北陸・大垣にいたる「奥の

図-2 月山・湯殿山と大網地すべり等の鳥瞰図(中村2009)(平成21年4月のグーグル写真を参考に図化)

写真-4 西川町　大日寺（現大井沢湯殿山神社）門前の巨大な「湯殿山」石碑

写真-5 西川町志津、五色沼湖畔の「芭蕉碑」、はるか彼方に冠雪した月山が見える

細道」の旅をした。その折、芭蕉らは六月三日新庄から羽黒山へ登り、四日、本坊における俳諧興行において「ありがたや雪をかほらす南谷」と詠み、その後八日月山に登っている。「木綿しめ身に引かけ、宝冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山気の中に、氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行動の雲関に入かとあやしまれ、息絶身こごえて頂上に至れば，日没て月顕る。笹を鋪（しき）、篠を枕として、臥て明るを待。日出て雲消れば、湯殿に下る（原文のまま）。」という芭蕉の文章から、当時の月山詣での人々の様子の一端をも窺うことが出来る。また、鶴岡市羽黒山、西川町志津・本道寺・大日寺等の各地には芭蕉翁の句碑などがあり、街道における足跡を窺うことができる写真-4、5。

更に沿道において著名な、古刹 注連寺（湯殿山を開山した折、弘法大師が堂宇を建てたと伝えられる歴史ある寺）には社会事業に尽くしたという川人足の鉄門海上人の即身仏、大日坊（弘法大師が開基された寺として知られる湯殿山総本寺）には近くの百姓であった眞如海上人の即身仏がそれぞれ祀られており、今日もなお参詣者が絶えない図-1、写真-1、2。地元では、上記湯殿山と両寺の存在は勿論のこと、旧六十里越街道をはじめ、各種文化遺産の重さを強く意識し、広く社会と人々に対する啓蒙と紹介に努力している。

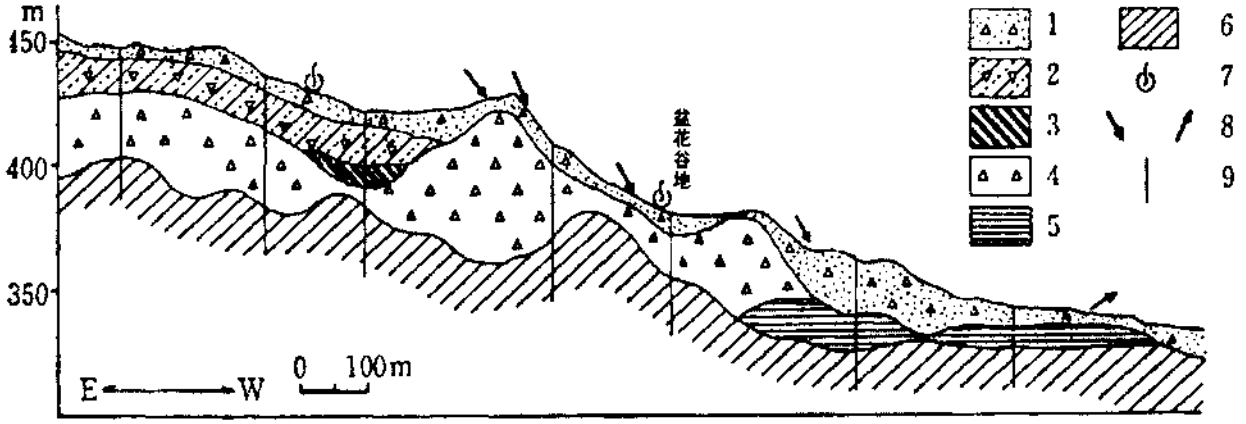
4
月山の火砕流堆積物と地すべり地盤

月山山麓には大小の崩壊性地盤が認められるが、ほぼ類似の地盤条件の場が多い。月山とその周縁は、基本的に花崗岩・第三紀の砂質泥岩・凝灰岩等が基盤であり、その上に月山起源の新旧火山性堆積物層が被覆している。各地質の厚さや広がり、その起伏等は多様で、地下水や地盤の挙動に影響を与えている。

一つの事例であるが、図-3（中村三郎1968）は大網地すべりの一縦断面と地質条件を示している。記録（山形県他1954）によれば、1906～'10年、1935～'38年に大きな地すべり変動があり、最大28mの水平変異が伝えられている。その後の約10数年来地域の人々は地すべりにおののき経過してきたが、1951年、県では大学等に依頼して本地域の地すべり調査に着手した。更に1958年、地すべり等防止法の施行に伴い、当地区ではいち早く、県と建設省土木研究所・大学のメンバー等により地すべりの実態調査が実施され、各種の対策が推進された図-3。

当時の各種調査結果から、地すべり地背後の盆花谷地（図-3参照）とその直下（南東）の水は非常に多く、こ

図-3 大網地すべり背後と変動域の縦断面図（中村1968）（電気地下探査・ボーリング結果より作成）



1、礫まじりローム・表土層　2、礫・砂まじり粘土　3、礫まじり粘土　4、安山岩質集塊岩　5、凝灰質粘土
6、泥岩・砂岩互層　7、湧水地点　8、クラック発生地点　9、ボーリング地点

れに対する排水対策が効果を上げているものと考えられている。地下水追跡の結果、谷地の水は必ずしも直接背後のみの水ばかりではない。深度20m前後の深い部分の水は時に変化が顕著で、特に雪解け時期や豪雨時における変化が大きかった。これは、月山起源の火山性砕屑物によって被覆され埋没されている三紀層上の古地形の存在が大きな意味を持つ。即ち古地形上、他地域からの多量の貯留地下水も加わり、これが深部を挙動し地すべり現象を助長していたわけで、いわば古地形の起伏・広がり・方向（ここではほぼ東西方向）が、大網上村地区地すべりの挙動に大きく反映していた（中村三郎2004）。加えて大網地すべり地の上部背後には、半円形状に発達する稜線沿いに、田麦俣川上流をカットして引かれた灌漑用の「天保堰」が構築されており、当時の水量はかなり多量で、堰の管理不良による漏水が、地すべりに与える影響も指摘されていた（谷口敏雄1964）。

最近（2009年3月）、大網地区西側（図-2参照）、七五三掛（しめかけ）で地すべりが発生した。4月早々には注連寺地区とその周縁を残し、南西部と前面の道路・家屋等の沈下、陥没、押し出しが顕著になりつつあり、今日、七五三掛集落七戸のうち既に五戸が自主避難を余儀なくされている写真-5。「この集落残り2戸だけになってしまったんです、寂しいです、しかし何とかしなければ……」と、同行した鶴岡市土木部の佐藤眞さんが呟いた。

千年近い時を刻むであろう集落や文化に対する愛着の深さ、地域の安心・安全と防災に対する意欲を強く感じた。当地区は前述の大網上村・下村の過去の変動域に近く、地すべり変異や地下水の挙動に類似の現象も考えられる。4月9日より数日、1時間2mmの移動量が記録されており（鶴岡市土木部・朝日対策本部）、すべり面もかなり深いのではないかと予想され油断できない写真-6。

写真-6 七五三掛地すべり（4/23）変動域は、地変による緊急避難のため七戸の集落が残り二戸となってしまった。⬇印は注連寺位置、右端道路の一部は、旧六十里越街道。

5
「縄文がえり」の地盤とその安定、そしてアメニティー

地震・豪雨・火山に伴う土砂災害の事例は多いが、最近は識者や研究者の予想をはるかに超える現象にしばしば遭遇する。2008年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震に伴う荒砥沢地すべりは、全く予想もつかない規模と現象であった(中村三郎2008)。類似の地質・堆積条件をもつ月山周縁の地域にとっても脅威である。加えて、最近は人間が引き起こす地球温暖化由来の降水量の変化が大きく、1997年以降100mm/h以上の降水量の頻度が増大している。このまま気候環境の変化が進展する場合、わずかオーバーであるが、約6000年前の縄文最盛期に近い降水量や不安定な地盤環境が現出するのではないかということも考えられ不安である。

地盤災害は人間と自然の接点において発生する。自然との共生は私達にとって不可欠の目標であるが、人間の都合優先と便利さのみを求める脱桎梏の生活は、社会構造を大きく変化させた。そして温暖化は営力(風化・浸食・堆積)の増大をもたらし、いわば「縄文がえり」の地盤条件の醸成は、被災の必然性を大きくしている。今日まで、長いながーい間、人々は住民自身による防災努力を繰り返し、「怯える住居」、「消え去る耕田」、「防止工の効果」……などの切実な記録(渡部留吉1960)が見られ、懸命な努力の跡がうかがえる。昔も今も、いつ起こるかわからない地すべりの恐怖におびえつつも、多雪寒冷な風土にしっかりと根を張り、里山の文化と生活を構築してきたであろう多くの人々を見た。今日、1958年の「地すべり等防止法」、2001年の「土砂災害防止法」施行以来、地域と各分野の人々による積極的な環境防災事業が推進されている。

長い歴史を刻んできた六十里越街道は、出羽三山信仰の道として、また物資や文化を運んだ出羽の古道も、1904年、新しい国道112号の開通によってその役割を終えた。更に今日は山形自動車道が庄内と内陸を結ぶ重要な役割を果たしている。最近、経済や生活手段の変化に伴う環境の変貌が著しく六十里越街道も例外でない。この地域、山岳信仰に由来する広域な人々との交流によって育まれた地域の文化・風土は勿論のこと、月山山麓における豊饒の森・春の新緑・秋の紅葉・渓流の四季、神宿り輝く月山等は、地元の人々にとっては誇り高い歴史と文化であり、訪れる人にとっては全てがトキメキと浪漫、そして安らぎでもある。

写真-5
地すべり地上部陥没地の露頭(中村4／23)。　月山起源の火砕質物、基盤の三紀層までかなりの厚さと広がりをもっている。

古来「西の熊野、東の湯殿」と人口に膾炙されている。景観を含む月山とその山麓の風情は、芭蕉の足を留め、茂吉親子の気持ちを生涯惹きつけた。月山の人と自然に関わる環境を見るかぎりにおいては、今日なお好ましい状況である。「神宿る山と森」は崇拝の念をもたらし、それが信仰につながり人々の心を惹きつけたのであろうか。今こそ、月山の自然に根ざした文化・地域の安定を厳しく保全し、砂防事業の推進によって、持続性に富む「アメニティーの源流構築の場」とすべき時と認識し前進したいものである。

(謝辞)本小文記載にあたり、田井中治、斉藤克浩、佐藤努、河村弘之、菅野孝美の各氏と鶴岡市土木部、西川町の皆さんにお世話様になりました、厚くお礼申し上げます。

(この原稿は5月8日にお預かりしたものです。)

★参考文献
1　あさひむら観光協会(2009)；ガイドマツプ「出羽の古道」
2　山形県教育委員会(1981)；山形県歴史の道調査報告書、pp、17-22、
3　渡部留吉(1960)；住民はおののく　大網の地すべり、82p、朝日文庫
4　中村三郎(1968)；電気探査の結果からみた大網地すべり地の特性、pp、219-222、第5回災害科学総合シンポジユーム
5　山形県・中村三郎他(1968)；大網地すべりについて、46p、山形県、
6　谷口敏雄(1965)；大網地すべり調査について、3p、私信、
7　中村三郎(2008)；東北の地震と土砂災害、8p、　治水砂防協会講演会、鶴岡市
8　中村三郎(2004)；埋没谷、pp、176-186、日本地すべり学界版〈地すべり――認識と用語集〉
9　笹沢信編(1999)；出羽三山文学紀行集成、271p、「松尾芭蕉；羽黒pp、7-8」
10　伊藤武(2005)；六十里越街道にかかわる歴史と文化、133p、六十里越街道文化会